

# ひょうご 水百景

## No.15 松か井の水（多可町加美区奥荒田）

～トンネル湧水を利用した平成の名水と復活した幻の名水～



写真-1 新松か井の水公園（平成24年5月撮影）

### ■ “平成の名水” を汲みに多くの車が・・・

多可町内を南北に走る国道427号を北上し、醤油・味噌の蔵元・足立醸造の新蔵を過ぎると寺内交差点、そこを左折して、主要地方道8号加美穴栗線を神河町に向かって5分ほど車を走らせると「新松か井の水公園」に着きます。そこには、水汲みに来た車が5～6台、休日など多いときは10台を超える車が停まっていて、水汲み場には上の写真のようにポリタンクやペットボトルがたくさん並べられています。

この公園は、加美穴栗線の「緑のランドマーク」として平成13（2001）年3月に完成したもので、3,700m<sup>2</sup>の敷地に、4ヶ所の水汲み場と19台分の駐車スペースが設けられています。水は高坂トンネル掘削時の湧水をドレーン（排水管）で集めて、道路側溝の山側に埋設したパイプで公園まで導水しています。水量は1日約38,000ℓと多く、ポリタンク5～6個なら短時間で汲み終わるのですが、中には軽トラいっぱい容器を積んで汲みに来る人もいます。そのため、時には20～30分程度の待ち時間を覚悟しないとイケません。



写真-2 かなりの水量が出ている

この「新松か井の水」は、加古川水系の右支川・杉原川に合流する奥荒田川の上流域にあり、「コウゾ<sup>※1</sup>と名水のむらづくり」をめざす地元奥荒田地区の老人会の方々が公園周辺の清掃活動を熱心に続けています。このような活動により名水にふさわしい良好な水環境が維持されているとして、平成20（2008）年に環境庁から『平成の名水百選』に認定されています。

※1 コウゾ：奥荒田地区では、『ひょうご水百景 No.9』で紹介した杉原紙の原料となる「楮（コウリ）」を「コウゾの森」や各家庭で栽培している。

## ■ 高坂トンネルの湧水を導水

高坂トンネルは、北播磨と中播磨の北部地域を東西に連絡する主要地方道 8 号加美穴栗線にあって、多可町・神河町の町境に位置しています。昭和 60 (1985) 年 10 月、高坂峠の交通の難所を解消するため、全長 870m のトンネル工事に着手しました。

NATM 工法を採用し、多可町側から掘り進め、約 3 年後の昭和 63 (1988) 年 12 月に開通、トンネル開通を記念して、多可町側の入口付近に、「開通記念碑」とともにトンネル湧水を利用した水汲み場のある小公園を県が整備しました。



写真-3 「高坂トンネル開通記念」碑

トンネルに湧出してくる水は、トンネル内の側面に設置した「へちま」構造の排水材でセンタードレーン（コンクリート舗装下に設置したφ300mmの有孔ヒューム管）に集めて多可町側の坑口付近に設置した柵に導水し、この水を水汲み場の水に利用していました。当時水質検査をした結果、アルカリ性がやや強いが飲用 OK だったそうです。これが「新松か井の水」の前身です。

開通当初は水汲みの車も少なかったのですが、ロコミで広がり水汲みの車が道路にはみ出て並びようになりました。写真-4 からわかるように、ここはトンネルを出るとすぐカーブとなっていて非常に危険なことから、約 800m 下ったところに新たな水汲み場として「新松か井の水公園」を県が整備しました。



写真-4 高坂トンネル多可町側入口



写真-5 トンネル入り口近くの水汲み場のある小公園

## ■ 工事で埋まり、工事で発見された“幻の名水”

では、元々の「松か井の水」はどこにあるのでしょうか。それは、現在の多可町加美区奥荒田の狭い町道（旧県道）を約 2km 入った所にあります。

昭和 32 (1957) 年、林道工事の際、土砂で埋まり所在が不明となって、一時は幻の水となっていました。それが、昭和 62 (1987) 年、治山堰堤の工事中に山の斜面から水が湧き出ているのが発見され、町が地元の古老らとともに位置関係などを調査した結果、「松か井の水」と確認されました。

かつて、峠越えの旅人が行き倒れになったところ、この水を飲むと回復したという言い伝えがある元祖「松か井の水」は、町道から階段を 20m ほど下りた所にあります。水汲み場にある立札には、「松か井の水」は、室町時代末期に播磨の国を支配していた赤松義村が定めた『播磨十水』のひとつ、「落葉の清水」のことだと書かれています。

筆者が、6 月末に行った時は、町道の石積擁壁が、平成 23 (2011) 年 9 月 20 日の豪雨で崩れたため、災害復旧工事 (L=6m) をして通行止めになっていました。水汲み場は、石積擁壁崩壊の影響で土砂が流れ込んで埋もれてしまったそうですが、写真-8 のようにとりあえず水が汲める状態には復旧されています。

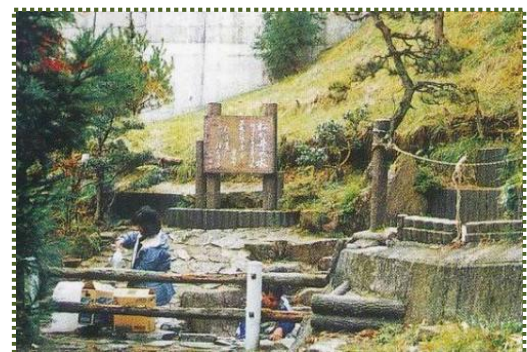


写真-6 松か井の水（『全健ひょうご』通巻 106 号から引用）

昭和 62 (1987) 年に旧加美町が水汲み場周辺を、写真-6 のように整備したのですが、今は周りの樹木がかなり枝葉を伸ばして暗く、土砂が流れ込んだ影響で水汲み場は荒れていました。

ここに来るにはすれ違い困難な狭い町道を2kmも走らなければならず、待避所が少ないことから車で来るには少し勇気がいります。さらに、車を直付けできず、250m手前に車を置くため、水汲みはかなりの重労働になります。そのため、「新松か井の水公園」ができてからは水汲みに訪れる人はほとんどいないようです。



写真-7 「松か井の水」の案内板



写真-8 災害復旧工事によりとりあえず水が汲める状態



写真-9 「松か井の水」の立札

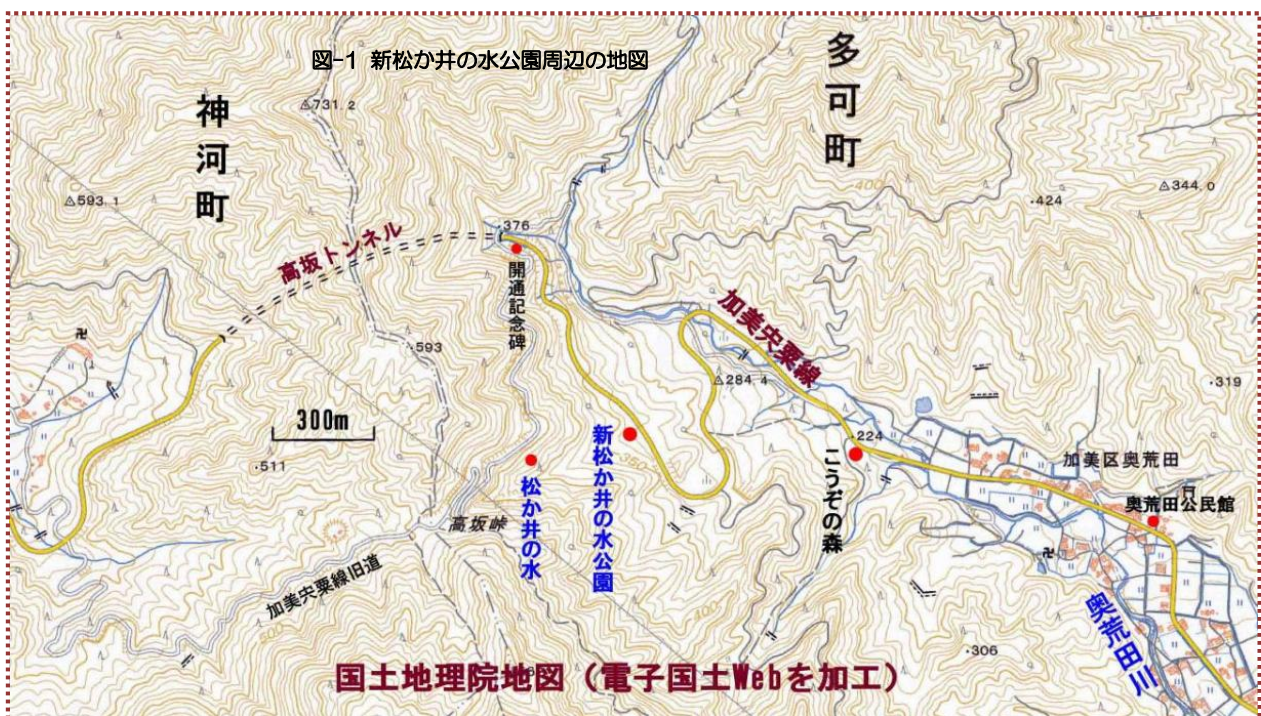
立札の説明を読むと、播磨十水の一つである「落葉の清水」が「松か井の水」であるように記されていますが、何となく腑に落ちないところが…。

播磨十水の内「落葉の清水」  
松か井の水

播磨十水は永正年間（一五〇四～一五二〇）播磨を支配していた赤松義村が定めたとされ、狂言で有名な野中の清水など十か所の清水が選ばれ、その一つが「落葉の清水」である。

地誌「播磨鑑」宝暦十二年（一七六二）には多可郡名所旧跡並びに和歌の欄に  
「落葉の清水」  
松か井荘 播磨十水の内也  
末久に枝も葉かへす常盤成  
松の落葉の清水涼しき・・・とある。

播磨史籍刊行会発行の「播磨古歌考」には赤松義村の選んだ播磨十水の一つで、この「古所名所考」にも多可郡松井庄、に多可郡松井庄、「古歌集」にも多可郡とある。松井もこの落葉の清水をいい、松井の庄名もこれから出たものであろう。東寺文書に建武元年（一三三四）松井庄が見えるから、荘園時代からあった庄名であろう・・・とある。



## ■ 赤松義村が定めた『播磨十水』

『播磨十水』を定めた赤松氏第十代当主・義村は、播磨一の豪族・赤松則村(円心)から数えて七代目に当たります。江戸時代に著された『播磨鑑(はりまかがみ)<sup>※2</sup>』の附録には次のように記されています。

### 【播磨十水】赤松義村ノ定置レシ所也

小野江清水(おのえのしみず) (姫路ぎふ町(侍町)也 郭内ほそく流るゝ水也)  
岡田苔清水(おかだこけのしみず) (飾東郡星田庄山崎村ノ内 小名 清水ト云)  
篠井清水(しのいのしみず) (揖西郡黒埼村)  
花垣清水(はながきのしみず) (揖東郡佐野村 古へ二条家ノ御領地也)  
小柳清水(こやなぎのしみず) (揖西郡平井村)  
御所清水(ごしょのしみず) (飾西郡田寺村邊梅ヶ谷)  
野中清水(のなかのしみず) (明石郡印南野ノ中)  
井ノ口清水(いのくちのしみず) (印南郡幣ノ庄井ノ口村)  
**落葉清水**(おちばのしみず) (赤穂郡舟曳ノ庄ノ内二在之)  
櫻井清水(さくらのしみず) (揖東郡黒岡村西ノ方在之)

当時、「十水」はお茶や硯の水に使われた名水で、義村は文亀3(1503)年に家臣の志水甲斐守の名で十水の所在地の構主(館の主)に対して「當國十水は名水であるから、気をつけてみだりに汲んではならない。水守には毎日に米一升、年毎に米十俵を与え、水守は三人ずつ申しつけるように」との通達を出しています。

では、どうして一地方の豪族が名水を定めたのでしょうか。

室町時代の応仁元(1467)年から11年間、京都を中心に続いた応仁の乱により京都は荒れ、以後約100年間に及び戦国時代へと移っていきませんが、公家や僧侶等は戦乱を避けて地方に逃れました。同時に多くの文化人・知識人が、近隣の丹波・摂津・播磨の守護大名のもとへ身を寄せ、いわゆる京都の東山文化<sup>※3</sup>を伝えたといわれています。これが当地で「書」や「茶道」に必要な名水が大切にされた背景のようです。

**※2 『播磨鑑』**: 江戸時代の宝暦12(1762)年頃に成立したとされる地誌。著者は平野庸脩(ようせい)で、播磨国印南郡平津村(現・加古川市米田町平津)の医者で暦算家。80才を超える長寿であったが、その半分を「播磨鑑」の著述に費やしたとされる。

**※3 東山文化**: 室町時代中期の文化で、八代将軍・足利義政(1436-1490年)が築いた京都の東山山荘を中心に、武家・公家・禅僧らの文化が融合して生まれたとされる。幽玄・わび・さびに通じる美意識に支えられ、能・茶道・華道・庭園・建築・連歌など多様な芸術が花開いた。慈照寺銀閣は東山文化を代表する建築である。

## ■ 「落葉清水」が2ヶ所?

「播磨十水」の根拠となっている『播磨鑑』は百余りの文献を引用して書かれたもので、引用文献の精度に負うところが大きく、そのため多少の間違いがあってもおかしくありません。

「松か井の水」汲み場にある立札には、『播磨鑑』の「多可郡名所旧跡並びに和歌」の欄に、播磨十水の一つ「落葉の清水」の所在地は松か井荘と書かれていますが、同じ『播磨鑑』の附録には「赤穂郡舟曳ノ庄」と記されています。

この点について『三日月町史第四巻 史跡』によると「赤穂郡」は間違いで「佐用郡舟曳ノ庄」が正しく、そうすると「落葉の清水」の所在地は旧三日月町になります。

『日本歴史地名大系』の「船曳庄」によると、『播磨国風土記』に記される讃容(さよ)郡中川(なかつ)里のうちの船引山に由来する庄名とされ、『和名抄』にみえる佐用郡中川郷域に成立したと推定される。志文川と支流の本郷川・角亀川流域の旧・三日月町域に比定される。保元3(1158)年12月3日の官宣旨に、山城石清水八幡宮護国寺領として播磨国船曳庄とみえる、とあります。

JR 姫新線の三日月駅北西にある「乃井野陣屋館」(写真-10)の近くの道端に、「播磨十水 落葉の清水」と刻まれた石碑が建っていて、そばに木柵で囲まれた水汲み場らしきものがあります(写真-11.12)。



写真-10 三日月藩 乃井野陣屋館



写真-11 「乃井野陣屋館」近くにある「播磨十水 落葉の清水」の石碑



写真-12 陣屋の近くにある「落葉の清水」碑

「落葉の清水」と刻まれた石碑は、乃井野陣屋館の西約 50m の所にある列祖神社の一の鳥居脇に建っています。列祖神社は、森家の藩主や祖先を祀った神社で、境内には寛政年間に建てられた藩校「広業館」の一部が現存しています。

石碑（写真-12）は、三日月町観光協会が昭和 55（1980）年 10 月に建立したもので、背面には右の文字が刻まれています。石碑横の木柵の中はわずかに水が溜まっている程度です。

往時 赤松氏全盛の時  
置塩城主二代目赤松義村  
茶道を嗜み播磨一圓の清  
水を募り其の良質にして  
茶に適したものを撰びて  
播磨十水の称を附す  
此の清水も亦其の中の一  
つなりと伝ふ  
三日月町観光協会

## ■ 昔の名水より今の名水

いずれが正しいのか白黒つけるつもりはありませんが、ただ野中清水や小柳清水、櫻井清水など、いずれも町中などの近場にあり、旧三日月町の「落葉の清水」も陣屋のすぐ近くにあります。お茶や硯に使う水は、身近にあってすぐ汲みに行けるからこそ重宝されるのです。名水を守るために「水守」をつけるのは、それが町中であって汚される可能性があるからです。山に行けば、わざわざ湧き水を探さなくても溪流にきれいな水が流れています。なので、町から離れた山中にある「松か井の水」が「播磨十水」に選定された水だとするのはかなり無理があるように思います。



写真-13 小柳清水（たつの市揖西町清水）



写真-14 野中清水（神戸市西区岩岡町野中）



写真-15 櫻井清水（太子町黒岡）

それよりも、新松か井の水は「コウゾと名水のむらづくり」のキャッチフレーズのもと地域で周辺の清掃活動を続けていて、水環境の保全状況が極めて優良であるとして、平成 20（2008）年 6 月に環境大臣から「平成の名水百選」に認定されていることの方が重要で、“昔の名前”にすぎらず、今の名声「平成の名水～松か井の水」を看板に掲げていくべきです。トンネルからの湧出量もかなり多く、多くの人が水を汲みに来ていることで、交流のまちづくりの一端を担えるのではないのでしょうか。

## ■ モノローグ

播磨地方には多くの名水がありますが、近年になって水道水の普及、農業による地下水の汚染、開発による地下水脈の破壊等により、水を使わなくなったり、あるいは使えなくなったり、水が枯渇してしまったりしています。

「松か井の水」は、林道工事の際に土砂に埋まってしまいましたが、30 年後に今度は治山工事の際に見つかり、復活します。そしてトンネル工事の際の湧水を利用して新たに「新松か井の水」が誕生しました。毎日多くの人が水汲みに来ています。名水の消滅も復活も、そして活用も、土木技術者の意識に負うところ大です。地域の歴史、風土、

自然をよく理解していれば、土木工事はそれらとうまく調和して、折り合いをつけることができるのではないでしょうか。

「新松か井の水」は、「松か井の水」と水源が異なり高坂トンネルの湧水を利用していることから、県 OB の K 氏は「あれは松か井の水とちゃう。まちがいの水や」と言われていたとか。

ところで、8月1日は「水の日」。水資源の有限性、水の貴重さ、水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるための記念日です。昭和 52 (1977) 年 5 月 31 日の閣議了解により「水の週間」(毎年 8/1~8/7) と合わせて定められました。年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まる 8 月の初旬にしたそうです。

#### 【参考資料】

- 1 『播磨鑑(全) 摂陽群談(上)』 歴史図書社 昭和 44 年 11 月
- 2 『三日月町史・第四巻 史跡』 三日月町史編集委員会編 昭和 41 年 7 月
- 3 『全建ひょうご・通巻 106 号』 平成 14 年

※発行：平成 24 (2012) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.15

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.15